

Title	英文学研究とマスメディア : Scrutiny の時代から New Left 登場まで
Author(s)	山田, 雄三
Citation	Osaka Literary Review. 41 P.75-P.88
Issue Date	2002-12-24
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25184">https://doi.org/10.18910/25184</a>
DOI	10.18910/25184
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 英文学研究とマスメディア

— *Scrutiny* の時代から New Left 登場まで —

山 田 雄 三

『英語青年』（1953年9月号）の「ジャーナリズム特集」において、西脇順三郎は繁栄する当時のジャーナリズムに対して、実にあいまいな賛辞を述べている。「日本のジャーナリズムは非常に繁栄しているので現在の日本の文化はジャーナリズムの文化と違ってよいと思う。これが日本のジャーナリズムに対する心ばかりのさゝげの言葉である。今日の日本の文化はなんだかジャーナリズムを中心として出来ているように感じられる。しかしこの傾向は勿論世界的な傾向であるかも知れない。」<sup>1</sup> それは、もちろん世界的な傾向であった。英国では戦後、新聞や週刊誌の発行部数が飛躍的に増大する。定期刊行物の発行部数は1938年には2,600万部程度だったものが、1952年には4,000万部まで数を伸ばした。日本でも1953年度には、年間3,400万部と戦後史上で最高部数の新聞が刷られ、1955年にはラジオの普及率は国民の74%にまで広がった。商業ジャーナリズムの興隆の要因は、広告収入の増加など物質条件の変化のみならず批評家や学者がそこに発言の場所を求めたことにもあった。西脇は、文筆を志すものがみな新聞、雑誌で発言する実状にふれた後、「学者のほうも同じことで、学藝欄という学者の出店みたいなものがある」、「ジャーナリズムに名をなさなければ学者もみとめられないといった点もあるようだ」と述べている。奇しくも、西脇のこの記事が発表された翌月には、戦中戦後を通して20年以上、商業ジャーナリズムを始め新しいメディアがもたらす弊害に警鐘を鳴らしつづけてきた文化批評誌 *Scrutiny* が廃刊されることになる。最終号の「告別の辞」は、新手のメディアに有能な若い世代を買収されて、メディアに匹敵する言説形成の centre

をついに大学という場に作ることができなかった Leavis の忸怩たる思いに満ち満ちている。<sup>2</sup>

この当時、批評家や文学者たちは、目まぐるしく発展してきたマスメディアと文化批評との関係性を再確認する必要にせまられていた。とりわけ英国では、*Scrutiny* 派の活動が社会に浸透する第2次大戦終結後から、その運動への見直しが始まる1958年頃にかけて、マスメディア時代に文学の伝統を継承できるのか、また文学は大衆の知的教育にどう貢献できるのか、そもそも大衆とは誰なのかなどなど、さまざまな問題が提出された。その後の歴史を後知恵で知る私たちは、英文学研究が個別作家や諸文学理論に専門化される中で、その問題の多くがいつのまにか英文学研究になじまないものだと感じるようになった。本稿には2つのねらいがある。第1に1950年代に提出された問題を、批評家や英文学者たちの言説のコントラストを通して浮き上がらせること、第2に、その中でも「ことば」と「読み」とをめぐる問題を英文学研究の場で継承することである。

### F. R. Leavis と E. P. Thompson

F. R. Leavis と E. P. Thompson。この一見、水と油ともとれる2人の論客を筆者が対比するわけは、両者が商業ジャーナリズムに抗して独自のジャーナルを主宰したことに注目したいためである。まず *Scrutiny* は同人たちのわずかな出資によって始められたきわめて小規模な同人誌であったことを思い出す必要がある。その創刊号は750部しか刷られなかったし、もっとも発行部数を増やした時でも1,500部程度であった。同誌の売上のみをおもな財源として、広告収入に財源を求める商業ジャーナリズムとの違いを強調しつづけた。読者を思考しない‘mass’に、または同じものを欲しが平準化された‘herd’に変えようとする商業ジャーナリズムへの敵愾心は、創刊当初から明らかであった。Leavis が提出した問題とは、どうしたら表現する能力を人々から奪う‘mass-civilization world’の条件を無効にするかに

あり、その答えの1つが商業ジャーナリズムの成立と件を飲まずに、中立的な価値判断を行なう批評を出版することにあった。<sup>3</sup> Leavis は、この趣旨に同調する知識人は 'minority' ながらも、社会の諸組織の中に散り散りに存在していると考えた。そして、*Scrutiny* という 'centre' に、それら散在する知識人—大学の研究生や若手講師、中等学校の教員や成人教育機関の教師—の再結集を呼びかけた。<sup>4</sup>

*The Making of the English Working Class* (1963) を出版して、1960年代の New Left 運動の中心となった E. P. Thompson は F. R. Leavis とは、一見したところ、活動の時期も場所も大きく隔たっているように思える。*Scrutiny* 派が Cambridge 大学を拠点に S. T. Coleridge の言う知識人の clerisy を形成しようとしたのと対照的に、E. P. Thompson は戦中戦後の *Scrutiny* の時代を共産党の内部に身を置き、Christopher Caudwell や William Morris の研究を通して 'minority' の活動を行なっている。'For nearly twenty years I have taken my share of door-knocking, committee work, and of organizing thinly attended meetings on behalf of minority causes; and of producing more or less ephemeral minority journals.'<sup>5</sup> 活動の場所は異なるが、双方とも 1890 年代に Northcliffe 卿が興した *Daily Mail* を商業ジャーナリズムの元凶と見る点で一致している。Thompson は *The Struggle for a Free Press* と題したパンフレット (1952) の中で、*Daily Mail* は「出版の自由」を唱えて新聞界を刷新したが、資本家や広告主が読者のモラルや購買を操作する自由があるだけで読者には自由が与えられていないと述べ、商業主義批判も可能な出版の 'real freedom' を訴えた。<sup>6</sup>

商業ジャーナリズムを痛烈に批判する一方で、この2人の論争家は、それに侵された現代文化の退廃を映す鑑として2つの理想郷を案出する。2つの理想郷、つまり高度産業化が始まる以前の英国村落コミュニティと東欧の新しい共産国である。

F. R. Leavis と Denys Thompson との共著で出版された *Culture and Environment* は、1933年の初版から1950年代の終わりまで5度も増刷されるまでの話題作であった。その中で著者たちは、George Bourne が残した村落コミュニティの記述を引用しながら、19世紀の高度産業化が破壊し尽くした 'organic community' を郷愁を交えて描き出す。'There is gossip, of course, 'George Bourne' adds. And we must remember that in the old rural England speech was an art, as it still is in those parts of the country where the relics of the old culture still linger. Instead of reading newspapers or going to the cinema or turning on the loudspeaker or the gramophone people talked; talked at work and at rest, at the public-house, at market, by the wayside and at the cottage door.'<sup>7</sup> その上で Leavis らは、かつての民衆が保持していた 'recreation' の文化は今日完全に消滅し、大衆は阿片に耽るように劣悪な新聞や雑誌を読み漁っては、そこで覚えた低俗なことばで閑談のわざを低下させていると述べ、社会に警鐘を鳴らした。

自国中心的な傾向が強い Leavis が、現代文化を映す鑑を自国の過去に求め、それを理想化したのと好対照に、E. P. Thompson は1940年代、世界的共産主義の立場に立ち、理想郷を東欧の若い共産国に見ている。Thompson は1946年に、Yugoslavia で鉄道を建設する篤志旅団に参加し、東欧の新興共産国の 'people's culture' を目の当たりにする。翌年彼が *Our Time* に寄せた記事には、東欧の青年たちが夕べの集いで詩の朗読、民族舞踊や *As You Like It* の上演を行っている様子が紹介されている。Thompson は、東欧では 'minority' の文筆家が民衆から離れたところから社会構造の歪みを暴く時代は終わり、民衆の新しい社会運動に積極的に参加し、この運動を通して着想と読者とを獲得していると結んでいる。<sup>8</sup> Leavis にとって、理想郷は永遠に失われた過去のものであり、Thompson のそれは資本主義を乗り越えた未来のものであった。そのため両者共に、「いま・

ここ」の現在がもつ文化の動力学を捉えられずにいた。

1950年代に2人が通った道程にも興味深いコントラストが見られる。まずは Leavis について。*Scrutiny* の反商業ジャーナリズム運動も *Education and the University* (1943) が提案した英文科カリキュラム改革も期待した効果を得られないまま1950年代後半には忘れ去られた一方で、*Revaluation* (1936) や *Great Tradition* (1948) において Leavis が実践した「再評価」は英文学キャンソンを完全に塗り替えていった。彼はしだいに商業ジャーナリズムや大衆文化にはふれなくなり、D. H. Lawrence という一作家の知性と感受性に現代のモラルの範を求めるようになる。1950年代、英国の共産主義者はより過酷な試練を受ける。鉄のカーテンは不動のものとなり、カーテンの向こうでは東独の蜂起や Hungary 動乱が勃発、さらには Khrushchev の Stalin 批判という衝撃も走った。そんな中、Thompson は 'socialist humanism' を提唱して、Lenin — Stalin 主義の硬直した定式を離れて語るための「ことば」を探し始める。'But what I think we can say is that Communism must regain a language of moral choice. In the absence of such a language, and of processes which ensure that political decisions are reached as a result of the quarrel between "necessity" and "desire," power and expediency will reign supreme.'<sup>9</sup> その後すぐに Thompson は社会変革の理論的かつ実践的 'centre' を作る目的で、*New Left Review* の創刊を計画し始める。

F. R. Leavis と E. P. Thompson。彼らの口吻は激烈である。それは失われたことばの回復キャンペーンであったように思える。失われたものは古き良き英国コミュニティのことばとマルクス主義の社会変革の声と大きく異なっていたが、それを継承すべきコミュニティの形成を目指した点では、両者は案外近いところにいたのかもしれない。

### L. C. Knights と Raymond Williams

演劇や映画などの視覚口語文化についても *Scrutiny* 派は積極的に関わっている。Broadway や Hollywood から流入する文化産業に対抗して、人々のことばと演劇との新しい関係を再編成しようとする試みはそこから始まっている。

例えば、*Scrutiny* 創始者の一人 L. C. Knights は ‘How Many Children Had Lady Macbeth?’ (1933) を発表して、A. C. Bradley の人物性格批評がヴィクトリア朝のイデオロギーであることを暴露する一方で、人物の塑像はことばのつなぎ合わせにすぎないとし、演劇のことばに注意を促した。Knights は、Shakespeare のことばが一人の天才によるものではなくて、17世紀のコミュニティが生産した活力溢れる伝達手段であったと考える。公的なことばが「市場取引や公立学校、慌ただしい鉄道旅行から生産されている」現況とくらべると ‘the advantage that Shakespeare enjoyed in being able to exploit to the full a popular idiom’ は一目瞭然であると、Knights は述べている。<sup>10</sup>

今日 Raymond Williams は British cultural studies の創始者として取り上げられることが多いが、大戦終結後から1950年代の初めまでは、F. R. Leavis や Knights の圧倒的な影響下に、演劇論や映画論を発表している。彼が著した *Drama from Ibsen to Eliot* (1952) は、Leavis が詩や小説で実践した practical criticism を演劇というジャンルにまで応用したものである。産業革命以降の口語英語が生みの営みの全容を表現する器ではなくなった以上、演劇が伝達網を広げられるかどうかは、産業革命が悪化させた生活様式とことばとを再生できるかどうかにかかっているというのが、Williams の主な主張であった。<sup>11</sup>

演劇は興行であり、同時に文学である。その共通の認識が Knights と Williams の演劇論の根底にある。産業とことば、経済活動と演劇との関係に注目した彼らの批評は、粗雑なマルクス主義の定式 - 土台と上部構造 -

を再検討した批評とも言えよう。

Knights は初期の Ben Jonson 研究から、‘the qualities embodied in Shakespeare’s English had an economic base’ という前提に立って分析を行なっている。同時に Knights はこうも言う。‘The ‘economic’ activities which helped to mould that supremely expressive medium fostered qualities (perceptions and general habits of response) that were not ‘economic’ at all.’<sup>12</sup> 興味深いのは、彼が民衆文化の土台について考えるとき、それが必ずしも上部構造を「決定」しない鑄型だと見ている点である。

Williams が次のように述べるとき、彼がKnightsと同様の視点で土台と上部構造を見ていたのは明らかである。‘The changes that we receive as record were experienced, in these years [from 1757 to 1827], on the senses: hunger, suffering, conflict, dislocation; hope, energy, vision, dedication. The pattern of change was not background, ... it was, rather, the mould in which general experience was cast.’<sup>13</sup> 文化を ‘whole way of life’ として捉える Williams にとって、文化の background は存在しない。ひいては、人の感覚、想像や認識は、上部構造に閉じ込められるべきものでもない。後に彼が理論化しようとした ‘idea of culture’ とは、産業革命後に起きた社会変化の渦の中から表出した新しい認識や過剰な反応、複雑な感情が鑄型に流れ込んで形となった複合概念であった。

映画や SF 小説をも視野に含めた 1950 年代後半の Williams の文化批評は、*Scrutiny* 派の「伝統」の概念とマルクス主義の構造概念とを継承、修正しながら、社会の流動と文化の変容とを可能にする ‘structure of feeling’ 論へと展開していった。

F. R. Leavis は、失われつつあることばと文化とを再評価して継承する minority clerisy の必要性を説いたが、Williams はそのような minority の活動は「いま・ここ」の変化に自己調整できずに、独断的な価値評価を押



しつける危険があると言う。<sup>14</sup> *Scrutiny* 派が好んで用いた喩えに「Greshamの法則」がある。それは、商業ジャーナリズムのことばや文化＝悪貨が、英国が伝承してきた文化伝統＝良貨を駆逐している実状への警句として使われた。Williams は、悪貨と良貨の喩えに拘泥する限り、「いま・ここ」の文化変容は捉えられないと言う。なぜなら悪貨であれ良貨であれ、貨幣として形容される既存の文化を別の既存の文化が凌駕する形では、文化の変動は起きないと考えたからである。

それでは、文化を流動化させる原動力はどこにあるのか。かつて Knights は形式批評、伝記批評、ジャンル批評など批評の分業化を批判する一方で、求むべきは詩の ‘structure of meaning’ を読むことだと述べた。<sup>15</sup> その概念を、マルクス主義の構造概念をも考慮に入れながらより深めたのが Williams の ‘structure of feeling’ である。ある時代に特定のコミュニティで産出されたものすべてが、有形無形にかかわらず関連しあっている。関連しあっているばかりか、その要素すべてが文化という複合体の中に溶解していて、目に見える形で分離していない。芸術作品をその複合体に照らし合わせて、作品内の要素が外のどの要素と対応しているか、ある程度まで解析できる。しかし、と Williams は言う。‘To relate a work of art to any part of that observed totality may, in varying degrees, be useful; but it is a common experience, in analysis, to realize that when one has measured the work against the separate parts, there yet remains some element for which there is no external counterparts. This element, I believe, is what I have named the *structure of feeling* of a period.’<sup>16</sup> つまり、‘structure of feeling’ とは、抽象的な概念を与えるには未発達、未分化な感情だが、社会を流動化するエネルギーを備蓄した構造ということになる。文化という複合体に溶け込んで未分化な「現在」の構造が未来を孕むとするこの概念は、Leavis の *For Continuity* (1933) を ‘for continuity in change’ へと方向転換させることになる。<sup>17</sup>

## Mass という問題

マスメディアに深い関心を寄せた Williams が次に思い至ったことは、実体としての mass とはだれなのか、そもそも mass は存在するのかという根本的な疑問であった。この疑問は、彼が教えていた成人教育機関 WEA の生徒との対話の中で生まれる。その生徒は、夫を待つ駅ホームで、先に到着した客車から降りてきた乗客の群れを見て、「無知で冴えない masses」だと形容した。話をするうち、その同じ列車に Williams 本人も乗り合わせていたことが分かる。その経験を通じて Williams がはっきりと認識したことは、「見る」という行為は一見、現象を理性的に捉える行為に見えて、慣習的でドミナントな「視座」を具現化する行為でもあるということであった。「無知で冴えない masses」とはいつも私以外の人であると捉える態度は、今日のイデオロギーが mass や the man in the street という決り文句を用いて、自分だけは別だと信じ込ませ（購買行動を操作し）た結果しみついたものである。<sup>18</sup> Williams はこの考えをさらに進めて、次のように述べている。‘I don’t believe that the ordinary people in fact resemble the normal description of the masses, low and trivial in taste and habit. I put it another way: that there are in fact no masses, but only ways of seeing people as masses.’<sup>19</sup> あるのは人々を masses と捉える眼差しだけなのだという指摘が印象深い。

マスメディアは発信者と視聴者との間に大きな壁を作り、視聴者を平準化された mass に変えようとしてつねに試みる。マスメディアの製作側からすると、労働者や初等教育までの教育しか修めていない人々は格好の大口の顧客であるのは事実である。だからといって、漫画やタブロイド紙、スポーツ鑑賞などの ‘popular culture’ が労働者コミュニティの ‘lived culture’ と完全に同義だと捉えてはいけないと、Williams は強調する。

そしてこの立場に立って、Williams は *Scrutiny* 派を超克しようとする。*Culture and Society* (1958) の最終章の中で、Williams は「読み書き能

力」にのみ拘泥する文化批評の陥穽についてこう述べた。'It is important to remember that, in judging a culture, it is not enough to concentrate on habits which coincide with those of the observer.' そして「読み書き能力」をめぐる議論は観察者＝批評家の限界を露呈していると言う。'To the highly literate observer there is always a temptation to assume that reading plays as large a part in the lives of most people as it does in his own.'<sup>20</sup> 問題なのは、一般読者が観察者（つまり批評家）たちと同じような日常習慣と生活リズムを持っていると頭から決めてかかることである。彼らの日常文化の全体像をまったく知らずに、単に何を読んでいるのかのみを物差しにして彼らの文化を判断することは、マスメディアの視座、つまり自分以外の大多数を 'masses' や 'bloc' と捉える視座を共有することになると、Williams は考える。結果として、読み書き以外にもわざを必要とする知的で創造的な文化活動があること、劇場やコンサート、美術館などの形体以外にもガーデニングや金属細工、大工仕事さらには政治運動までも含む 'a whole range of general skills' があることは見過ごされてしまう。<sup>21</sup> 人々が何を読んでいるかだけではなくて、日々の様々な文化活動の中でどのように読書をしているかへと視点に移されたことの意義は大きかったし、今日の私たちもそこから学びなおす必要があるように思う。

他方、Williams の言う「mass とはつねに観察される他者である」という認識は、観察する者に表象＝代弁 (represent) する位置の問題を意識させた。Richard Hoggart は著書 *The Uses of Literacy* (1957) において、利潤動機でジャーナルを生産する「あいつら (their)」ブルジョアの文化との対比を明らかにしながら、必ずしもその消費者となっていない「おれたち (our)」労働者たちの文化を表象＝代弁した。*The Uses of Literacy* のテキストには労働者たちの生き活きとした会話が再現されたが、そのことばは同時に 'working-class speech' と名づけられた。この本を書評した文章の中で、Williams はそのような表象＝代弁が労働者文化のブロック化をもたら

す危険性を指摘して、こう言っている。‘In fact there is no such thing as ‘working-class speech’: the only class speech in England is that of the upper and middle classes; the speech of working-class people is not socially but *regionally* varied.’<sup>22</sup> Williams の批評方法は、慣習的でドミナントな視座に反省をめぐらすこと、それと同時に、その視座への過剰な反応がもたらす文化対抗的な視座も疑うことにあった。文化批評とは、変容しつづける ‘whole way of life’ に対応して、観察する位置を不断に自己調整しない限り成立しないという意識がその方法を裏打ちしている。‘Culture is ordinary’ — Williams がこの表現に込めた批評の責務は重い。

以上、第2次大戦終結後から1958年までに提出された問題を、批評家や英文学者たちの言説のコントラストを通して検討してきたが、そこに通底する問題意識とは、新しいメディアが台頭する中で、人々はどのような人間関係を再編成し、どのような共通のことでコミュニケーションを図るかにあったように思われる。

冒頭に挙げた西脇の文章に立ち返ってみたい。西脇の鋭敏な知性は、近代産業社会は農業、結婚などの女神を掠奪してきたが、「近代の journalism も1つの industrialism の部分である」ことを明確に理解していた。それだからこそ、西脇がジャーナリズム文化に沸き立つ都会を尻目に、田舎を逍遙することを選ぶのは印象的である。彼は上の文章をこうつづける。「この間も美濃の國から飛驒の高山へ通じる昔の街道を行つてみたが、その自然は実に静かであった。近代産業の掠奪をうけていない」。筆者は、西脇の文章に、*Scrutiny* 派の批評家たちに通じる感受性、新しいメディアが作り出した事態に対する共通の反応を感じざるをえない。ただ、F. R. Leavis らが新しい事態に抗して *Scrutiny* という社会的磁場を作り、50年代末の文化批評が登場する土壌を養成したのと対照的に、西脇はただ一人耽美的に日本の田舎を漫歩するのである。

西脇の文章が書かれ、*Scrutiny* が廃刊されて、半世紀が経とうとする。その間、すべてはメディア化し、商業主義の共謀のネットワークは社会全体に張りめぐらされたといっても過言ではない。今日、ほとんど全能のメディアに囲まれて、かつては文化批評にも深く関わっていた知識人たち、とりわけ英文学者はその問題に距離を置いている。英国で Thompson、Hoggart、Williams などの英文学者が cultural studies を起こした頃、日本の英文学研究はアメリカに渡った *Scrutiny* 派、つまり「新批評」と出遭っていた。禁欲的なまでに文化を語らない「新批評」に始まる文学批評理論時代の幕開けを迎えていた。その時代から 1980 年代の脱構築理論にいたるまでの英文学研究は、継承してきた英文学キャンソンを素材にしながら、文学理論の精緻化にもっぱら携わってきた。

ところが今日、知の大衆化が新しい展望を迎える中で、ナショナリズムや男性中心主義と少なからず関係のある英文学キャンソンの高度に理論的な文学理論も過小に評価され始め、英文学者はその存在理由をも問われるようになってきた。そんな英文学研究不要論に対する英文学者の反応の 1 つは、実益を問はずに質す喧しい批判に背を向けてうずくまりながら、「美」という概念をそっと掌で温めるという態度に表れている。それは半世紀前に西脇がとった姿勢とどこか似ている。忘れてはいけないことは、美は個人的な経験だとしても、ひとたび美を論じることは社会的な営みであり、伝達しあう共通のことばや感情を必要とするということである。Williams はかつて 'Literature is communication in written language' と述べた。<sup>23</sup> 今日の新しい世代がたとえ *Othello* の原作や制作年代を知らなくても、彼らはどこかでその物語を聞き（読み）知っていることはよくある。映画を通じてかコミック誌を通じてか、あるいはウェブページやゲームソフトを通じてかもしれない。求められるのは、本が読まれない状況をとって文化の退廃を嘆くより、今ある生の全体的な営みとの関係において、人々がどのような場所でどのような方法で物語を「読んで」いるのかを観察することではないか。そして観察者と被

観察者とに共通のことは、物語、感情を「再発見」することで、英文学者は人々（けっして「無知で冴えない masses」ではない）との新たな関係、ひいては文化を作り出せるかもしれない。英文学研究には、1950年代後半に日本の英文学が採らなかつたもう1つの軌跡から学ぶべき視座と希望とが残されている。

## 注

- 1 『英語青年』 Vol. XCIX. — No. 9. (September 1, 1953), p. 410
- 2 F. R. Leavis, 'Valedictory', *Scrutiny* Vol. XIX. No. 4 (October 1953), pp. 256-257
- 3 F. R. Leavis, *New Bearings in English Poetry: A Study of The Contemporary Situation* (London: Chatto & Windus, 1954), p. 231; *Scrutiny* Vol. I. No. 1 (May, 1932), pp. 2-7
- 4 *Essays in Criticism* Volume 3 (Oxford: Basil Blackwell, 1953), p. 227
- 5 E. P. Thompson, 'The Segregation of Dissent' (1961), in *Writing by Candlelight* (London: Merlin, 1980), p. 1
- 6 E. P. Thompson, *The Struggle for a Free Press* (London: A People's Press, April 1952), p. 19
- 7 F. R. Leavis and Denys Thompson, *Culture and Environment: The Training of Critical Awareness* (London: Chatto & Windus, 1959), pp. 71-72
- 8 E. P. Thompson, 'Comments on a People's Culture', *Our Time* (October 1947), pp. 36-37
- 9 E. P. Thompson, 'Agency and Choice — I', *The New Reasoner* (Summer 1958), p. 103
- 10 L. C. Knights, *Drama and Society in the Age of Jonson* (London: Chatto & Windus, 1937), p. 11
- 11 Raymond Williams, *Drama from Ibsen to Eliot* (London: Chatto and Windus, 1952), p. 28
- 12 *Drama and Society in the Age of Jonson*, p. 12
- 13 Raymond Williams, *Culture and Society: 1780-1950* (London: Chatto & Windus, 1958), p. 31
- 14 *Ibid.*, p. 256
- 15 L. C. Knights, 'Literature and the Study of Society': Inaugural Lecture Delivered 28th May, 1947 (Sheffield: Univ. of Sheffield, 1947), pp. 4-5

- 16 Raymond Williams and Michael Orrom, *Preface to Film* (London: Film Drama Limited, 1954), pp. 21-22
- 17 Raymond Williams, *Reading and Criticism* (London: Frederick Muller, 1950), pp. 29-30
- 18 Raymond Williams, 'The New Party Line?' (1957), in *Border Country: Raymond Williams in Adult Education*, ed. John McIlroy et al. (Leicester: National Institute of Adult Continuing Education, 1993), pp. 82-83
- 19 Raymond Williams, 'Culture is Ordinary' (1958), in *The Raymond Williams Reader*, ed. John Higgins (Oxford: Blackwell, 2001), pp. 17-18
- 20 *Culture and Society*, p. 308
- 21 *Ibid.*, p. 308
- 22 *Essays in Criticism* Vol. VII. No. 4 (October 1957), p. 425
- 23 *Reading and Criticism*, p. 107